



★例題24 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

最近の小中学校の様子を取材して驚くのは、学級という子ども集団での人間関係の変わりようだ。

1学級当たりの子どもの数は、小学校が平均28.1人、中学33.0人と、昔にくらべ縮んだ。にもかかわらず、クラス全体の一体感は希薄になる一方だと、先生たちはいう。

小5、小6ともなると、運動のできる子、苦手な子、アニメ好きの子といった小グループに分かれ、違うグループの子との接触はほとんどなくなる。中学では、同じクラスで「あの子の名前何だっけ?」も珍しくない。

友だちづきあいはおっかなびっくり(注1)だ。似た者同士のグループも安心できない。どう思われるか気にし、空気を読んでしゃべる。いつも誰かとつながっていないと不安。メールには30分以内に返信をする。小学生の半数以上が「仲間外れにされないよう話を合わせる」と答えたとの調査がある。その割合は5年前から5ポイント増えた。

①小さな孤島で羽を寄せ合い、傷つくのを恐れる。学級や学校はいまやストレスいっぱいの空間かもしれない。我慢を重ねた感情はときに破裂し、暴力になり仲間や教師に向かう。グループ内では誰かに「いじられキャラ(注2)」を演じさせ、発散する。いじめにエスカレートしても、外からは見えにくい。

のびのびとした人間関係を築く力はなぜ、こんなに弱ったのだろう。

多くの教師や研究者が指摘するのが家族と地域社会の変容だ。兄弟、祖父母、近所のガキ大将、地域の大人。そうした異質な人とふれあう機会がめっきり減り、子どもは他者との関係のつくり方が未熟なまま、学級集団に放り込まれる。②様々な問題行動の背景を、こうとらえることもできよう。

文部科学省は、学級の人数の標準を40人から35人へと30年ぶりに改め、数年かけて学級規模を今よりひと回り小さくする計画だ。それに合わせて、教員の定数も増やそうとしている。

子ども一人ひとりに向き合う時間をもっと確保するため、先生の数は増やすべきだ。だが学級を小さくするだけでよいか。子どもが社会性を身につけられる場になるよう、教室に風を吹き込む必要がある。

多様な存在と交わる中で、子どもは自己を肯定される経験を重ね、対人関係能力をきたえてゆくものだ。

増えた先生を臨機応変に組みあわせ、1学級を複数担任にしたり、子の状況に応じて学級の人数を考えたり。学生や地域のボランティアが入り、子どもとの③斜めの関係を持ち込むことが有効だ。違う学年との交流授業や運動会といった行事も、大事にしたい。

財源や教育効果をめぐって、少人数学級の議論が今後本格化する。どんな集団のあり方が子どもにとってよいか、忘れてはならない視点だ。

(朝日新聞2010年10月3日)

(注1) おっかなびっくり：失敗を恐れて、こわごわ何かをすること (注2) いじられキャラ：仲間からからかわれる役割の人

問1 ①小さな孤島で羽を寄せ合い、傷つくのを恐れるとはどういう意味か。

- 1 似た者同士の小グループを作り、メンバー同士いたわり合い、仲間外れをしないように気をつける。
- 2 クラスが少人数になった上に、ほかのクラスの人とは接触がないので、数少ない友だちを失わないように気を使う。
- 3 話の合う人と作った小グループのメンバーとしかつきあわず、その中で、仲間外れにされないように気を使う。
- 4 一人ひとりが孤立し、同じクラスの人の名前もわからないので、不安を感じ、必要以上に誰かとつながっていようとする。

問2 ②様々な問題行動とは、何を指すか。

- 1 ストレス発散のために、仲間や教師に暴力をふるったり、仲間をいじめたりすること
- 2 異質な人とふれあうことを避けるが、接触したときには、けんかをしてしまうこと
- 3 ほかのグループの人と話を合わせようとして、ストレスをため、怒りを爆発させること
- 4 各グループがクラス全体を支配しようとして、グループ同士が対立すること

問3 ③斜めの関係の例として最も適当なものはどれか。

- 1 子どもとその父親
- 2 子どもとそのクラスメイト
- 3 子どもとクラス担任の教師
- 4 子どもと近所の八百屋のおじさん

問4 この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 小中学校の教室で起こっているいじめや暴力という問題に対し、文部科学省は無策である。早急にクラスサイズの縮小と教員の増員を実現し、教室に風を吹き込むべきだ。
- 2 学級において子どもたちは小グループに分かれ、同じグループ内の人間関係にもストレスを抱えている。このような変化は異質な人とふれあう機会が減ったことに起因する。
- 3 学校の問題の原因は、家族や地域社会の人間関係の変化にある。国は、学級規模や教員数だけでなく、子どもたちが様々な他者とふれあう機会についても考えるべきだ。
- 4 小中学校の問題の背景には、地域社会や家庭の変容がある。政府は学級規模を縮小する計画だが、それよりむしろ教員の数を増やして教室に斜めの関係を持ち込むべきだ。



キーワード：小中学校、学級、人間関係、他者との関係、対人関係能力

→ 小中学校の学級での人間関係について書かれた文章？

**問1**に答える

① 小さな孤島で羽を寄せ合い、傷つくの恐れる。は、小中学生の様子を表した文である。

「**比喻**」に注目し「小さな孤島」「羽を寄せ合い」が何をたとえているのかを読み取る。

「小さな孤島で」＝「小グループに分かれ」

「違うグループの子との接触はほとんどなくなる」(第3段落)

「羽を寄せ合い」＝「誰かとながっていないと不安」(第4段落)

「傷つくの恐れる」＝「仲間外れ」にされることを恐れる(第4段落)。

1：「似た者同士のグループも安心できない」と書かれている。メンバー同士いたわり合うのではない。

2：「小さな孤島で」というのは、クラスが少人数だという意味ではない。また、ほかのクラスの人との接触については書かれていない。

3：正解

4：一人ひとりが孤立するのではなく、小グループを作る。

**問2**に答える

② 様々な問題行動の背景を、こうとらえることもできよう。

「こう」と②様々な問題行動の指す内容を、さかのぼって追っていく。

第5段落：我慢を重ねた感情は…暴力になり…いじめにエスカレート… 問題行動

第6段落：疑問提示文：

「のびのびとした人間関係を築く力はなぜ、こんなに弱ったのだろう。」 問題行動

第7段落：答え：…家族と地域社会の変容だ。…放り込まれる。 背景

② 様々な問題行動の背景を、こうとらえることもできよう。

第6、7段落は「問題行動の背景」(＝なぜこんなに弱ったか)が述べられている。

「こんな」の指す、第5段落が「問題行動」である。

1：正解

2：異質な人とけんかをするとは書かれていない。

3：ほかのグループの人と話を合わせようとするとは書かれていない。

4：グループがクラス全体を支配しようとするとは書かれていない。また、グループ同士の対立が起こっているとは書かれていない。

**問3**に答える

「学生や地域のボランティアが入り、子どもとの③斜めの関係を持ち込むことが有効だ。」

③斜めの関係とは、「子ども」と「学生や地域のボランティア」との関係である。

つまり、子どもとは直接の上下関係(＝先生や親など)や、横の関係(＝同級生など)にはない人である。この関係になっている例を選択肢から選ぶ。

1：父親は、子どもとは上下関係にある。

2：クラスメイトは、学校内で横の関係にある。

3：クラス担任は、学校内で上下関係にある。

4：正解

**問4**に答える

段落ごとの内容をまとめる。

第1～7段落：最近の子どもの集団に見られる人間関係の変化とその原因の分析

第8段落：学級規模を小さくし、教員の定数を増やす＝政府の対策案

第9段落：…先生の数が増やすべきだ。だが学級を小さくするだけでよいか。

政府の対策に賛成 (反語) いや、よくない←筆者の主張

第10段落：多様な人と関わらせることが対人関係能力向上のために必要

第11段落：対人関係能力向上のための具体案

第12段落：学級の人数だけでなく、集団の質にも目を向けた議論をすべきという主張

つまり、筆者は、政府の対策には賛成だが、それだけではなく、子どもに様々な人とふれあう機会を与えることも考えるべきだと述べている。

1：文部科学省は対策案を出していると書かれている。

2：筆者は原因を分析するだけでなく、これからどうすべきかを述べている。

3：正解

4：政府の対策案として教員の数を増やすと書かれている。

練習57 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

われわれはよく①世界ということばを使う。地球上の地域全体を、そうよぶとみんな考えている。ところが仏教によると、「世」とは前世とか来世とかいうように、時間の一くぎりのことである。一方の「界」は境界などというように、一定の空間のことだ。

つまり世界とは、時間と空間を一まとめにした範囲をさすことばであったが、とくに時間をふくんでいることは、いま、とんと忘れられているのではないか。

また宇宙ということばも、広く使われる。この「宇」も建物を数えるときに使われるように、中国では一つの空間を示す。

そしてもう一つの「宙」は過去や未来を意味する。そこで宇宙ということばも、時間と空間の両方にまたがる範囲をあらわすことになる。ふつうは大空の果てまでの空間の広がり宇宙というように思われているが、それはまちがいらしい。

どうもわれわれは②世界や宇宙から時間を追い出してしまっているが、そもそも人間をとりまく空間は、時間も重ね合わせたものだと思える方が正しい。

しかしそんなことは、教室で教えてもらえなかったように思う。むしろ時間と空間は、まったくあい対立し合うものだと思われてきたのではなかろうか。

ところがこれは近代ヨーロッパの考えで、アジアでは二つは一体のものと認識していたのである。

それでは日本はどうだろう。日本語では時間を「とき」、空間を「ところ」という。じつは(ややこしい学問上の手続きは、いま省くが)、「とき」と「ところ」は仲間ことばで「同じ仲間、少しちがったもの」を意味する仕組みの一つである。

いまの日本語がいつできたかは、残念ながらわからない。しかし三世紀ごろに始まるのではないかと、私は考える。つまり千七百年も前から日本は、インドや中国とまったく同じように時間と空間をひと組のものと考え、③それぞれが、相手なくしては存在しないと思っていたのである。

いま私たちは、世界的に物を見ようとか、宇宙的広がりが必要だという。その時、はたして過去はどうであり、未来はどうなっていくかを考え合わせながら、世界的に、また宇宙的に考えているだろうか。

現在のことばかり考えていたのでは、世界的でも宇宙的でもない。広い視野には、過去への観察や未来への希望が欠かせないのである。

(中西進『日本人こころの風景』創元社)

問1 ①世界ということばについて、本文の内容と合うものはどれか。

- 1 世界ということばは、本来「地球上の地域全体」を表していた。
- 2 仏教によると、世界ということばで「時間の一くぎり」という意味を表す。
- 3 西洋では、世界ということばで「時間と空間を一まとめにした範囲」を表す。
- 4 世界ということばは、本来、空間だけでなく時間も含む範囲を表していた。

問2 ②世界や宇宙から時間を追い出してしまっているのはなぜか。

- 1 近代ヨーロッパの影響を受けたから。
- 2 アジアの考え方をそのまま受け継いでいるから。
- 3 ヨーロッパでもアジアでもない、日本独自の考え方をしているから。
- 4 広い視野を持つ新しい考え方をしているから。

問3 ③それぞれとは、何を指すか。

- 1 インドと中国
- 2 世界と宇宙
- 3 過去と未来
- 4 時間と空間

問4 この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 「世界的」「宇宙的」ということばは国や文化によって意味が違うということを、多くの人々に知ってほしい。
- 2 人々は「世界的」「宇宙的」ということばから見えるアジアとヨーロッパの考え方の差を意識すべきだ。
- 3 「世界的」「宇宙的」ということばを使うなら、空間だけでなく時間、つまり、過去や未来まで見る視野が必要だ。
- 4 過去を観察したり未来への希望を持ったりできるから、「世界的」「宇宙的」ということばをもっと使ったほうがいい。



練習 58 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

子どもと大人の関係は、一般に、「いずれ大人になる」未成熟者と、「既に一人前」の成熟者との関係として捉えられる。しかし、子どもの異質性を、大人と水平に対峙(注1)させて考えるなら、それは「文化を異にする者」相互の関係ということになり、また、①垂直に置き並べるなら、それは「文化を先取る者」との関係ということになろう。子どもが「大人との差異」において「子ども」であってみれば、その差異をどう位置させるかで、彼らとの関係の取り方は変わってくることは自明であろう。(中略)

いつの時代にも、子どもたちは、その時代の中心に位置する大人の文化を生きず、その異質性をあらわにして大人との差異を顕在化させてきた。しかし、その差異がおおらかに受け止められ、「子どもとはそんなもの」と②大人たちに許容されていた時代もあり、逆に、その差異に大人たちが過敏となって、「いまの子どもは」と嘆きの種にする時代があることも事実であろう。とすれば、この両者の違いが意味するものは何か。

前者の場合、訪れる次代の方向が明確であり、変化の速度もまた緩慢であって、子どもたちが生きるであろう次の時代が予測可能であるため、大人たちは、次の文化を「先取りした」子どもらの言動を、おおらかに許容し得たのであろう。一方、変化の速度が人々の適応を上回るだけでなく、変化の方向も予測不能であって次に訪れるであろう近未来が不安視される時、子どもたちが示す大人と異なる一挙手一投足(注2)が人々を混乱と不安に陥れるのではないか。こんな時、大人たちによって「子ども」は「異星人」とされ、「何を仕出かさか分からないコミュニケーション不能の存在」として忌避(注3)され兼ねないのである。

いま、子どもに対する忌避感情が高まりつつあるとすれば、そして、時にそれに対抗するかのよ  
うに、子どもたちの「暴発」と見える言動が私たちに驚かせるとすれば、変化する時代の動きに大人たちが従い得なくなっていることの証しではないか。時々刻々、変化し続けるこの時代が、それを先取りする「子ども」たちと、確立した文化価値のなかで時代の要求する生産活動に従事する「大人」たちと、この両者の共存を従来になく③困難にしていると言えそうである。

(本田和子『それでも子どもは減っていく』筑摩書房)

(注1) 対峙: 向かい合って立つこと

(注2) 一挙手一投足: 細かい一つ一つの動作

(注3) 忌避: 嫌って避けること

問1 ①垂直に置き並べるとは、何をどのようにすることか。

- 1 子どもと大人の間を、どちらの文化が新しいかという図式で考えること
- 2 子どもと大人の間を、どちらの文化が優れているかという図式で考えること
- 3 子どもの異質性を、大人との差異がどの程度かを示す図式で考えること
- 4 子どもの異質性を、大人との差異がなぜ生じたかを示す図式で考えること

問2 ②大人たちに許容されていた時代とあるが、大人が子どもの異質性を許容していたのはなぜか。

- 1 変化の方向が不明確な時代だったから。
- 2 来るべき時代が予測可能な時代だったから。
- 3 コミュニケーション不足の時代だったから。
- 4 子どもと大人との差異に気づいていない時代だったから。

問3 ③困難にしているとあるが、何が「困難にしている」のか。

- 1 子どもに対する忌避感情
- 2 「暴発」と見える言動
- 3 確立した文化価値
- 4 変化し続ける時代

問4 この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 子どもは次代に生き、文化を先取る者であるのだから、大人は子どもの異質性を忌避せず、おおらかに許容すべきだと考えられる。
- 2 いま、子どもたちが大人に対して「暴発」しているのは、大人の生きている文化の価値に反発を感じている証拠であると考えられる。
- 3 いま、大人と子どもの関係が難しくなっているのは、時代の急激な変化に大人がついていけず、不安を感じているためだと考えられる。
- 4 子どもと大人の間は時代によって変わるものだから、時には大人が子どもを異星人のように感じてしまうのもしかたのないことだと考えられる。

練習59 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

携帯電話を買うというのは、本当は携帯電話を買っているのではなく、人とのコミュニケーションを買っていることになる。

誰かが誰かと話すたびに、個人の懐から電話会社へと金が流れているのだ。普通の電話だって同じことだけれど、あれはまだ場所の制約があった。携帯電話をみんなが持つようになって、いつでもどこでも誰とでも、話ができるようになった。

これは確かに便利なようだけれど、別の面から見れば、いつでもどこでも誰とでも、話をするごとに金がかかるようになったということだ。

その携帯電話にメールだのカメラだのインターネットの機能がついて、便利になったと喜んでいますが、それも見方を変えれば、個人から金を集める方法がより巧妙になったということ。

道端に綺麗な花が咲いていた。昔なら家に帰って「母ちゃん、花が咲いてたよ」と話すところだけれど、今の子は携帯で撮って送信する。

道に迷っても、誰かに聞かずに、携帯のインターネットで調べる。

横断歩道を渡っているときも、喫茶店で誰かと話しているときですら、携帯電話にかじりついている若者がどれだけ多いことか。①携帯が脳味噌の一部になってしまったんじゃないかというくらい、あらゆることに携帯を使っている。

そしてそのたびに、どこかの誰かのところに、世界中から金が集まっていく。その誰かは、笑いが止まらないはずだ。

次期首相を誰にするかなんて物騒な相談をしている政治家であろうが、夜更けのコンビニの前に座り込んでメールをしているガキであろうが、どんなヤツでも構わない。とにかく携帯を使っている人間を見かけるたびに、ほくそ笑んでいる(注1)に違いない。言葉を発するたびに漏れている息が、

②札東に見えてるんじゃないか。(中略)

そういうことに、気づいていない人が多すぎる。

携帯で生活が便利になったといたって、ロクに意味のあるコミュニケーションなんかしていないのだ。「今日のデートは楽しかったです」とか「こんな大きな犬のウンコを踏んでしまいました」とかなんとか。

インターネットにしても、まともに使いこなしている人間がどれだけいるか。掲示板に人の悪口を書いたり、読んだり。俺みたいにスケベな写真見たり。そうかと思えば、わけのわからないインチキ通販に引っかかったり。

ほとんど意味のない会話やメールをしたり、情報のやりとりをするために、毎回、無駄な金を払わされ続けていることに気づいていない。

③牧場に囲われて、シーズンごとに毛を刈られる羊みたいなものだ。

そういうことに目覚めて、「俺たちは羊じゃない。携帯電話は絶対に使わないぞ」と宣言する若者が、どうして出てこないのか。通信機械なんて他にいくらでもあるだろうに。

教育基本法を改正するなら、国を愛する心を育てるなんて抽象的な話をするよりも、携帯電話のダークサイドを子供に教えることの方が大事なんじゃないか。

(北野武『全思考』幻冬舎)

(注1)ほくそ笑んでいる：うまくいったと満足して一人でひそかに笑っている

問1 ①携帯が脳味噌の一部になってしまったとはどういう意味か。

- 1 携帯電話を使わないとコミュニケーションも判断も何もできない。
- 2 携帯電話の機能の使い方がわからず、いつも頭を抱えている。
- 3 携帯電話が体の一部のようになり、持っていないと落ち着かない。
- 4 携帯電話のことばかり考えていて、ほかのことが考えられない。

問2 だれの目に②札東に見えてるのか。

- 1 物騒な相談をしている政治家
- 2 コンビニの前に座り込んでいるガキ
- 3 電話会社の関係者
- 4 一般の人々

問3 ③牧場に囲われて、シーズンごとに毛を刈られる羊とはどんな人のことか。

- 1 高いお金を払ってでも安全な環境を買おうとする用心深い人
- 2 ほかに人に守られて、身ざれいにしてもらっている幸せな人
- 3 外に出ず、柵の中でのんきに暮らしている世間知らずな人
- 4 快適な生活をしているつもりで、所有物を奪われている哀れな人



問4 この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

- 1 我々は便利な携帯電話を手に入れたが、その機能を十分に使いこなしているとはいえ、意味のないコミュニケーションにしか役立てていないのはもったいないことである。
- 2 我々は便利な道具を手に入れたと喜んでいるが、携帯電話に支配され、コミュニケーションのために無駄にお金を奪われていることに気づいていない。
- 3 携帯電話やインターネットによって我々のコミュニケーションが希薄になっているだけでなく、犯罪にまで巻き込まれる危険性があることを子供に教える必要がある。
- 4 現代社会はコミュニケーションは買う時代だが、その内容にはくだらないことが多いので、本当に買う必要があるコミュニケーションかどうか選別すべきである。